

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 1 日現在

機関番号：32407

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00287

研究課題名(和文)『先代舊事本紀』の注釈的研究

研究課題名(英文)A study of Sendaikujihongi annotations

研究代表者

工藤 浩(Kudoh, Hiroshi)

日本工業大学・共通教育学群・教授

研究者番号：90636101

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主目的は『先代舊事本紀』の注釈書編纂のための調査と原稿作成にある。初年度には、本文十巻の原文を入力し、それに基づいて本文校訂、訓読、施注、口語訳の方針についての検討を重ね、巻毎の担当を決定した。続く2年で、校訂本文の策定、訓読、口語訳、施注の作業を順次行い、原稿を作成した。校合は輪王寺所蔵天海本を加え、日本文学、日本史学、日本語学、神道史学の四分野の最新の研究成果を調査、分析し訓読、口語訳、施注に反映させた。最終年度に入稿し4度の校正を経て『先代旧事本紀注釈』(花鳥社2022)として刊行した。

研究期間に、研究代表者は関連する学術論文を4本、分担研究者2名はそれぞれ4本、1本を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果として刊行した『先代旧事本紀注釈』(花鳥社2022)は、校訂本文と訓読、語注、口語訳を備えた『先代舊事本紀』初の本格的な注釈書である。校訂本文は、従来用いられた鎌田純一『先代舊事本紀の研究 校本の部』(吉川弘文館1960)に替わるテキストである。訓読、口語訳、施注には、関連する分野の最新の研究成果を盛り込んだ。日本文学、日本史学、日本語学、神道史学の研究はもとより、日本の古代文化に関心を持つ一般の利用にも耐え得るよう、平易で簡潔な表現を心がけた。本研究の成果は、『先代舊事本紀』自体とそれを用いた研究の進展を齎し得るとともに、広く国民に対して研究内容を開示するものである。

研究成果の概要(英文)：The main purpose of this study is to investigate and prepare the manuscript for compiling the commentary of "Sendaikujihongi". In the first three years, the work of formulating the text of the revision, reading the proofreading, colloquial translation, and giving notes was carried out in sequence, and the manuscript was prepared. The Tenkai book owned by Rin-no-ji was added to the proofreading. The latest research results in the four fields of Japanese literature, Japanese history, Japanese linguistics, and Shinto history were investigated and analyzed, and reflected in reading, verbal translation, and notes. It was submitted in the final year, proofread four times, and published as "Sendaikujihongi Annotation" (Kachosha 2022).

During this research period, four related academic papers were published by the principal investigator, and four and one by the two shared researchers.

研究分野：日本上代文学

キーワード：先代舊事本紀 最新テキスト 校訂本文 訓読 口語訳 語釈

1. 研究開始当初の背景

(1)『先代舊事本紀』は、『古事記』『日本書紀』『古語拾遺』に依拠した文献である。成立事情は未詳であるが、物部氏と石上神宮に関する独自の記載内容を持つことから、石上神宮と関係の深い物部氏の人物によって8世紀に編纂されたものと考えられている。奈良時代以前の古代前期の文学、歴史、言語、思想の研究に利用できる文献資料は、『古事記』『日本書紀』などごく限られてしまうため、当該文献はそれを補う意味で重要である。

『先代舊事本紀』を研究に利用する際のテキストには、従来は鎌田純一『先代舊事本紀の研究 校本の部』(吉川弘文館 1960 以下「鎌田校本」とする。)が用いられていたが、入手が困難な点が先ず障害となっていた。内容的に見ても、刊行後60年を経て現在の研究状況に合わない面が生じている。

(2)『先代舊事本紀』の注釈書はこれまでも数点刊行されてはいるが、学術的見地に立った注釈書は未だ作られてはこなかった。全て漢字のみで書かれた文献であるため、解釈が困難な箇所も多々あり、テキストの問題と相俟って、研究者の間でも資料に用いることを躊躇する向きさえあった。その一方で、日本文学、日本史学、日本語学、日本思想史の中でも神道学のそれぞれの分野で個々に推進された近年の『先代舊事本紀』の研究は目覚ましいものがあるが、研究が各分野で個々に為されるため、研究者にとっても隣接領域の成果を自らの研究に活かすことが困難であった。

(3)『先代舊事本紀』の、現在の研究水準に見合うテキストと、学際的な成果を見渡した注釈を備えた注釈書の刊行が望まれる状況にあった。

2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、先ず第一に現在の研究レベルに合致した『先代舊事本紀』のテキストとしての校訂本文を作り、利用しやすい形で研究者に提供することにある。

(2)併せて、これまでの研究成果を踏まえた訓読文、語句の解釈、口語訳を示し、研究者はもとより日本の文学、歴史、言語、思想に関心を持つ国民に広く『先代舊事本紀』を読んで、その内容を知り、利用できる環境を整備することを目指した。

(3)前記の(1)(2)項目を満たす『先代舊事本紀』の注釈書の刊行を最終の目的とした。

3. 研究の方法

(1)本研究の目的達成に向けて、注釈書の編纂方針について話し合いを重ね、分担を決めて順次原稿を執筆することとした。研究の着手に先立ち、科学研究費助成事業基盤研究(c)『先代旧事本紀』の総合的研究(15K02236)とその成果を公表した工藤浩編『先代旧事本紀論 史書・神道書の成立と受容』(花鳥社 2019 以下「論集」とする。)の内容に立脚して進めることを前提として確認した。原稿執筆にあたっては、以下の(2)~(5)の方針を策定した。

(2)校訂本文を作るに当たって、祖本とされる卜部兼永筆本を底本として、諸本による本文校訂を行うこととする。所在は知られているが、前記の鎌田校本では漏れていた輪王寺所蔵天海本、石上神宮蔵本の2本を本文校訂に加える。校異は、前著の写本系統の研究を踏まえて、卜部兼右本、石川忠総本、三浦為義本と度會延住本を中心に頭注に掲げる。鎌田校本では『古事記』『日本書紀』『古語拾遺』に依拠する箇所を、それぞれ校訂本文の傍らに点線、実線、波線を引いて示していたが、校訂本文の右傍に『古事記』『古語拾遺』左傍に『日本書紀』の引用箇所そのものを示す。

なお、輪王寺所蔵天海本は、既に先述の基盤研究(c)において調査を終えており、石上神宮蔵本を今回調査する予定であったが、予期せぬ新型コロナウイルスの感染症蔓延のため、3年間の研究期間に実施することができなかった。期間を延長して2021年度の実施を目指したが、状況は好転せず、本研究での新たな写本調査は断念せざるを得なかった。

(3)訓読は、『古事記』『日本書紀』『古語拾遺』に依拠した部分は、それぞれの最新テキスト、『先代舊事本紀』は前著までの近年の研究を踏まえる。

(4)語句の解釈については、前著で確認したこれまでの『先代舊事本紀』の研究成果を最大限に反映させ、訓読文の頭注とする。

(5)口語訳は、前項(4)の語句の解釈に基づいて、専門用語を可能な限り排して平易な語句による表現となるよう心掛ける。

(6)最終年度には、完成させた原稿をもとに、注釈書の刊行に向けて科学研究費助成事業研究成果公開促進費に申請をすることを確認した。

(7)注釈書の原稿執筆に加えて、研究代表者と分担研究者は『先代舊事本紀』と、それに関連する文献、事柄を題材とした論文を個々に執筆し、順次公表してゆくこととする。

4. 研究成果

(1)工藤浩、松本直樹、松本弘毅校注・訳『先代旧事本紀注釈』(花鳥社 2022年、604頁、ISBN: 978-4-909832-53-5)

本研究の最終目的と定めた『先代舊事本紀』の注釈書である。刊行に際しては、科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果公開促進費（学術図書 21HP5027）の交付を受けた。

本書は、校訂本文、校異、訓読、語釈、口語訳を備えた、学術的見地から編纂した初めての『先代舊事本紀』の本格的な注釈書である。校訂本文は、これまでの研究成果を踏まえ、校合には天海本を加えた最新のテキストとしての意味を持つ。学術研究に於いては、信頼の置ける『先代舊事本紀』のテキストとしての利用に耐えるものである。左右に依拠したと考えられる『古事記』『日本書紀』『古語拾遺』の本文を掲げることで『先代舊事本紀』独自の記事の本文中の所在が明確となるとともに、それを校訂本文と対照することで、『先代舊事本紀』の編纂、更には本文中の神話・伝説・系譜記事の形成の過程について考える際の利用に供するものである。訓読とその頭注に掲げた語釈は、前著に於ける関連分野の最新の研究成果を織り込み、『先代舊事本紀』の研究目的での利用を容易にした。訓読の下段にも、同様に前著で明らかとなった事項を反映させて、『先代舊事本紀』の内容を、研究者はもとより広く日本の古代文化に関心を持つ国民が知ることが可能となった。

本書には『先代舊事本紀』に関する、何点かの新たな知見が示されている。『先代舊事本紀』の底本を書写した卜部兼永は、『古事記』も書写している。『古事記』では、伊勢系諸本のみがイザナキの鎮座地を「淡路」とし、兼永も他の諸本と同様に「淡海」とする。兼永は『先代舊事本紀』巻第一「陰陽本紀」ではそれを「淡路」と記して、『古事記』の用字とは一致しない立場を採っていることを明らかにした。ほぼ『日本書紀』からの抄録で本文がなされる『先代舊事本紀』人代記事に見られる漢籍の利用についても、何点か新たな指摘を行った。巻第九「帝皇本紀」推古天皇条では、『日本書紀』には拠らず独自に董中舒『春秋繁露』を引用していること、「孝経に曰く」と記述しながら『孝経』には見られない『後漢書』李善注からの孫引きをしている点などである。

本書の刊行により『先代舊事本紀』自体の研究の深化が予想されるが、本書を利用するの文学、歴史、言語、思想（主に神道思想と祭祀）に関する研究の進展が期待できる。研究利用だけではなく、学部学生をはじめ、中学校・高等学校の国語科、地理歴史科の教員、神職をはじめとする神道に携わる人々、更には日本古代の文化に関心を持つ人々に、文化財としての『先代舊事本紀』が広く共有される条件を整えた。

(2) 工藤浩編『先代旧事本紀論 史書・神道書の成立と受容』（花鳥社、2019年、308頁、ISBN：978-4-909832-09-2）

先述のように、2015-2017年度に科学研究費助成事業基盤研究(c)『先代旧事本紀』の総合的研究（15K02236）を受けて実施した研究の成果を公表した論集である。研究代表者、分担研究者の以下の論文を納める。他の共著者に、小村宏史、伊藤剣、鈴木正信、渡邊卓、西岡和彦、福田武史、奥田俊博、小林真美、星愛美。

松本直樹「神から人への「系統史」 『先代旧事本紀』の構想と構成」（6-27頁）

工藤浩「天孫本紀」所載系譜をめぐって」（79-104頁）

松本弘毅「『先代旧事本紀』の諸本研究をめぐる現状と課題」（224-261頁）

本論集の刊行により、各分野の『先代舊事本紀』研究の現在における到達点と、今後の研究課題を明確にすることができた。

(3) 『先代舊事本紀』を対象とした学術論文の公表

研究代表者、分担研究者は、本研究により次の『先代舊事本紀』を対象とした学術論文各1本を執筆し、公表した。

松本弘毅「『先代旧事本紀』三浦為春本とその周辺諸本をめぐって」『古代研究』第52巻（早稲田古代研究会、2019、22-32頁）

工藤浩「石上神宮と先代舊事本紀の編纂」『古事記年報』63（古事記学会、2021、21-39頁）

松本論文は、写本系統の中で三浦為春本の位置づけと意義に再検討を加えたもの、工藤論文は、従来は関与が未詳であった物部首・布留宿禰の系統が『先代舊事本紀』編纂に果たした役割を論じたものである。

(4) 『先代舊事本紀』に関連する分野の研究書の刊行

松本直樹 松本直樹 松田浩 上原作和 佐谷眞木人 佐伯孝弘著『古典文学の常識を疑う』（勉誠出版、2019、204頁 ISBN：978-4-585-29183-1）

(5) 『先代舊事本紀』に関連する分野の学術論文の公表

また『先代舊事本紀』に関連した内容の学術論文として、工藤3本、松本直樹5本の計8本を執筆し、査読を経て公表した。

松本直樹「神代」に起源する記・紀の「天皇史」の構想 天皇と三輪神の関係から 瀬間正之編『記紀の可能性』（古代文学と隣接諸学10）（竹林舎、2018、400-426頁、ISBN：978-4-902084-49-8）

工藤浩「託宣と天神地祇の祭祀」『国文学研究』第188集（早稲田大学国文学会、2019、1-14頁）

工藤浩「大嘗祭に関する二、三の問題」『上代文学』第123号（上代文学会、2019、9-20頁）

松本直樹「神話 が作る国家 列島古代の精神史」『文学語学』227（全国大学国語国文学会、2019、10-19頁）

松本直樹「日本書紀神代巻の構成」『上代文学』第124号（上代文学会、2020、16-29頁）

松本直樹「味耜高彥根神 日本書紀天孫降臨章を読む」『國學院雑誌』第121巻第11巻（國

學院大學、2020、202-216 頁)

工藤浩「アメノウズメと猿女君」『國語と國文学』第 99 卷第 2 号 (東京大学国語国文学会、2022、3 - 16 頁)

松本直樹「古代神話伝説作品の構図 書き手の視座から見る『古事記』と『播磨国風土記』」『国文学研究』第 196 集 (早稲田大学国文学会、2022、1 - 14 頁)

工藤論文では、『先代舊事本紀』本文の依拠する『古事記』『日本書紀』と国家祭祀との関わり扱った。松本論文は、『古事記』『日本書紀』と『播磨国風土記』の構想と編纂を考察した内容である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 8件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松本直樹	4. 巻 124
2. 論文標題 『日本書紀』神代巻の構成	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 上代文学	6. 最初と最後の頁 16 - 29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本直樹	4. 巻 121 - 11
2. 論文標題 味耜高彥根神 『日本書紀』天孫降臨章を読む	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 202 - 216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 工藤浩	4. 巻 63
2. 論文標題 石上神宮と先代舊事本紀の編纂	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古事記年報	6. 最初と最後の頁 21 - 39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 工藤浩	4. 巻 188
2. 論文標題 託宣と天神地祇の祭祀	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国文学研究	6. 最初と最後の頁 9-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 工藤浩	4. 巻 123
2. 論文標題 大嘗祭に関する二、三の問題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 上代文学	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本直樹	4. 巻 227
2. 論文標題 神話 が作る国家 列島古代の精神史	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文学・語学	6. 最初と最後の頁 10 - 19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本弘毅	4. 巻 52
2. 論文標題 『先代旧事本紀』三浦為春本とその周辺諸本をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 古代研究	6. 最初と最後の頁 22-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 工藤浩	4. 巻 99 - 2
2. 論文標題 アメノウズメと猿女君	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 3 - 16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本直樹	4. 巻 196
2. 論文標題 古代神話伝説作品の構図－書き手の視座から見る『古事記』と『播磨国風土記』－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国文学研究	6. 最初と最後の頁 1 - 14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松本直樹
2. 発表標題 『日本書紀』神代巻の構成
3. 学会等名 令和2年度上代文学会秋季大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 工藤 浩
2. 発表標題 大嘗祭に関する二、三の問題
3. 学会等名 2019年度上代文学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 工藤 浩、松本 直樹、小村 宏史、伊藤 剣、鈴木 正信、渡邊 卓、西岡 和彦、福田 武史、松本 弘毅、奥田 俊博、小林 真美、星 愛美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 花鳥社	5. 総ページ数 308
3. 書名 先代旧事本紀論 史書・神道書の成立と受容	

1. 著者名 松本直樹、松田浩、上原作和、佐谷眞木人、佐伯孝弘	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 240
3. 書名 古典文学の常識を疑う	

1. 著者名 瀬間正之編 松本直樹（共著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 竹林舎	5. 総ページ数 544
3. 書名 記紀の可能性	

1. 著者名 工藤 浩、松本 直樹、松本 弘毅	4. 発行年 2022年
2. 出版社 花鳥社	5. 総ページ数 604
3. 書名 先代旧事本紀注釈	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松本 弘毅 (Matsumoto Hiroki) (30434244)	早稲田大学・文学学術院・その他(招聘研究員) (32689)	
研究分担者	松本 直樹 (Matsumoto Naoki) (50239109)	早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授 (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------